

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

► 「スルコトガアル」の意味に関する一考察

A Study of the Semantic Analysis of "surukoto ga aru"

doi:10.6205/jpllat.32.201212.09

台灣日本語文學報, (32), 2012

作者/Author : 林青樺(Chin-Hwa Lin)

頁數/Page : 185-208

出版日期/Publication Date : 2012/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.6205/jpllat.32.201212.09>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

關於 “*surukoto ga aru*” 句意之探討

林青樺

淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

本論文以行為主體的特徵及過去經驗或前例是否存在的觀點，來探討分析 “*surukoto ga aru*” 的句意。首先，本論文先從行為主體的特徵來探討 “*surukoto ga aru*” ，得知基本上行為主體無論是個別特定的主體，或者是一般性、統稱性的主體，都可以使用於表示〈反覆性〉、〈可能性〉的 “*surukoto ga aru*” 。而經由本論文的深入探討之後，得知 “*surukoto ga aru*” 表示〈可能性〉的句意方面，若以過去之經驗・前例是否存在以及描述的焦點為基準，可分為〈屬性之可能性〉、〈事象發生之可能性〉、〈假想之可能性〉三大類。由上述內容可知，影響 “*surukoto ga aru*” 句意最大的因素並非主體之特徵，過去的經驗・前例是否存在以及描述的焦點才是決定 “*surukoto ga aru*” 句意的重要關鍵。此外，經由本論文的考察結果得知，“*surukoto ga aru*” 所表示的〈屬性之可能性〉，不同於潛在可能句型所表示的一般所認知的性質，而是一種非絕對性的可能性。

關鍵詞：「*surukoto ga aru*」 反覆性 可能性 經驗 描述的焦點

A Study of the Semantic Analysis of “*surukoto ga aru*”

Lin, Chin-hwa

Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

This paper describes the meaning of “*surukoto ga aru*” in modern Japanese. The viewpoint of this paper is the characteristic of agent and the existence of experience or precedent. The conclusions are as follows.

- (1) The agents of the actions expressed by “*surukoto ga aru*” that means [repetition] and [possibility] are not only general agent, but also individual agents.
- (2) The meaning of “*surukoto ga aru*” which expresses [possibility] can be classified as [qualitative possibility], [event occurrence possibility], [imaginary possibility] with the standard for the existence of experience or precedent, and the focus of description. Therefore, the factor influences the meaning of “*surukoto ga aru*” is not the characteristic of agent, but the existence of experience or precedent.
- (3) The meaning of “*surukoto ga aru*” which expresses [qualitative possibility] is different from the one that potential sentences means, and it means a kind of possibility which is not so absolute.

Keyword: “*surukoto ga aru*”, repetition, possibility, experience,
focus of description



「スルコトガアル」の意味に関する一考察

林青樺

淡江大学日本語文学系助理教授

要旨

本論は、主体の特徴と過去における事象生起の有無という観点から、「スルコトガアル」の意味を考察したものである。まず、主体の特徴から「スルコトガアル」の意味を検討した。その結果、「スルコトガアル」は基本的に主体が個別的にも一般的にも、〈反復性〉、〈可能性〉を表すことが可能である、ということを明らかにした。そして、「スルコトガアル」の表す〈可能性〉は、事象がかつて生起したことのあるかどうかといった経験・事例との関わりと叙述の焦点によって、〈属性的 possibility〉、〈事象生起の possibility〉、〈仮想の possibility〉という三つのタイプに分けることができた。したがって、「スルコトガアル」の意味を左右するファクターは、主体の特徴ではなく、過去の経験または事例が存在するかどうかということと叙述の焦点なのである。さらに、「スルコトガアル」の〈属性的 possibility〉は、一般に認識されている性質から逸脱した、条件付きのポテンシャルであり、潜在可能文の表すような絶対的なものではない、ということが明らかとなった。

キーワード：「スルコトガアル」　反復性　可能性　経験
叙述の焦点

「スルコトガアル」の意味に関する一考察

林青樺

淡江大学日本語文学系助理教授

1. はじめに

現代日本語においては、「ーことがある」が使われる構文として、次のようなものが挙げられる。

- (1) 花子は宿題を忘れることがある。
- (2) 次郎は北海道へ行ったことがある。

上記の例文のように、「ーことがある」におけるコトの内部のテンス形式が過去形のものもあれば、非過去形のものもある。本論では(1)のような「スルコトガアル」を取り上げ、その意味について考察し、(2)のような、いわゆる主体の経験を表す「シタコトガアル」を扱わないこととする。

「スルコトガアル」は、ときどき起こるという〈反復性〉の意味を表す場合と、事象生起の見込みという〈可能性〉の意味を表す場合が見られる。

- (3) 私は週末家族で外食することがある。 〈反復性〉
- (4) 沖縄でも、冬には雪が降ることがある。 〈可能性〉

しかし、次の(5)のように、〈反復性〉の意味にも〈可能性〉の意味にも解釈できる場合も見られるため、「スルコトガアル」の意味のメカニズムを再検討する必要がある。

- (5) この時計は日に当たらないと、止まってしまうことがある。

そこで、本論は、主体の特徴と過去における事象生起の有無という観点から「スルコトガアル」を考察し、「スルコトガアル」の意味のメカニズムを明らかにすることを目的とする。なお、次の（6）（7）のような例文は、「スルコトガアル」の「コト」が形式名詞ではなく、具体的な物事を表すため、本論の考察対象から外すこととする。

- （6）ぼくには、しばらく前から気にかかっていることがあるのだった。（山田詠美『ぼくは勉強ができない』）
- （7）「しかしね。君はひとつ忘れていることがある。君はなぜイエスが十字架にかかったかを知っていますか。」（三浦綾子『塩狩峠』）

2. 先行研究

「スルコトガアル」について論じている研究として、仁田（1981）、高橋（1994）、宮崎（2004）が挙げられる。

まず、仁田（1981）は「スルコトガアル」について、次のように説明している。

〈可能性〉を表わす「こと」は、通常「ことが（は、も……）ある」といった形式で使われる。

② 文字の使ひ方に依つて別の音も表はすことがありますから、……（「古代国語の音韻に就いて」）

③ 最初の恋愛がそうだと生涯そういう女ばかりにひかれるってこともあるんじゃない？（「夏の終り」）

④ 熟練した運転手でも事故を起こすことがある。

②、③、④は、それぞれ、承接のされ方を異にしているが、いずれも、〔別の音も表はす〕、〔そういう女ばかりにひか

れる]、[事故を起こす]といった事象の成立〈可能性〉(傾向性と名付ける方が適当な場合も可能性の用語の中に含める)の存在を述べている文である。

(仁田 (1981) : 90)

仁田 (1981) は「スルコトガアル」の表す〈可能性〉を上記のように定義し、「事象成立の〈可能性〉といった意義は、基本的に、ボイスやアスペクトやテンスと同様、事象の核を表わす〈格構造〉の意義に付加される事象成立の様相的あり方に係わるもの一つである。」と述べている。しかし、「このコップは急にお湯を入れると、割れことがある。」「あの二人は仲直りすることがあるのだろうか。」のように、「スルコトガアル」の表わす〈可能性〉は必ずしも同質だとは限らないため、さらに詳しく考察する必要がある。

また、高橋 (1994) は、「スルコトガアル」はダブルテンスの述語形式と見なし、以下のように指摘している。

この形式の名まえとして、「ときどきおこることをあらわす形式」というのは正確でない。たとえば、つぎの例は、ときどきおこるというより、可能性が実現することをあらわすといったほうが適切だし、(1) の最後の例は、ときどきおこることを否定しているというより、一度としておこることがないことをあらわしている。

- ・何かのはずみで今迄見えなかつたものが、突然
見えてくることがあります。(あ・うん)

これらをひっくるめた適切な名づけかたがみつかなかつたので、いちばん例のおおい用法を代表として、この形式を名づけたのである。

この用法で第二テンス形が非過去形のばあい、(1) のおくの例のように、ひろげられた現在の時間帯での実現、(1) の最後や、このすぐ前の例のように、可能性の実現

をあらわすもののほか、つぎの例のように、未来での実現をあらわすものがある。

- ・何もそんなに案じるにも及ぶまい焼棒杭と何とやら、又よりの戻ることもあるよ。(樋口一葉「にごりえ」)

(高橋 (1994) : 149¹)

このように、高橋 (1994) は「スルコトガアル」の〈可能性〉の意味について、「ときどきおこること」だけでなく、「可能性の実現」「未来での実現」を表わす場合もあることを指摘し、「スルコトガアル」の〈可能性〉の意味の多様性に言及している。しかし、なぜこのような違いが見られるのか、その背景の原因については触れていない。

一方、宮崎 (2004) は、「『スルコトガアル』は、ある種のポテンシャル表現であると考えられる。その用法が反復性から可能性にわたるという事実が、そのことを如実に物語っている。だが、質を表す文がポテンシャルであるというのと同じ意味でのポテンシャルなのではない。事象それ自体は、時間軸上に位置づく性質をもつものとして捉えられている。ただその具体的な位置づけを不問にしているのである。」と述べている。また、「スルコトガアル」の意味について、「スルコトガアル」の表す〈反復性〉は不規則・低頻度といった特徴を持っているのに対して、「スルコトガアル」の表す〈可能性〉には「存在論的可能性」、「特性化」、「主体の一般化」といった特徴が見られると説明し、次の例文のように、「ある条件下において例外的な事例が発生する可能性があること」を述べる場合もあると説明している。

¹ 引用の中の「(1) の最後の例」というのは、次の例文である。

例) せめておかあさんを一度どこかへ連れて行ってあげなさいよ。
小父さんがあのお身体だから、なかなかおもてへ出なさること
もないのよ。

(高橋 (1994))

- (8) 切符をなくされたお客様には、始発駅からの運賃を請求することがあります。 (宮崎 (2004))

なお、「特性化」と「主体の一般化」といった〈可能性〉の特徴について、主体が個別的な名詞句の場合、単文構造である(9)は、(10)のように文脈の支えがなければ、〈可能性〉を表す文としてはやや解釈しにくくなるので、「スルコトガアル」の文が〈可能性〉を表す文へ移行するにあたっては、主体の性格（個別か一般か）も重要な役割を果たすと指摘している。

- (9) 彼は急に怒り出すことがある。 〈反復性〉
(10) 彼は急に怒り出すがあるので、気をつけて話したほうがいい。 〈可能性〉
(宮崎 (2004))

このように、「スルコトガアル」は基本的に〈反復性〉と〈可能性〉という意味を表し、主体が個別か一般かという主体の性格が二つの意味を分化する上で重要な役割を果たしていると指摘されてきた。つまり、個別主体であれば、一般主体のようにポテンシャル化が進行せず、文脈の支えがなければ、〈可能性〉を表す文としては解釈しにくい、ということである。しかし、上記の(9)と(10)は、なぜ文脈を付け加えることによって「スルコトガアル」の意味が〈反復性〉から〈可能性〉へ移行するのかについてはほとんど言及されていない。また、次の(11)のように、主体の「アキ」が個別的であるにも関わらず、「スルコトガアル」が表すのは〈可能性〉であり、〈反復性〉としては考えにくいので、「スルコトガアル」の意味の実現条件が明らかになっていないと言わざるを得ない。

- (11) アキという一人の人間のなかに包み込まれていた

美しいもの、善いもの、繊細なものは、どこへ行ってしまったのだろう。(中略) あるいはいつか、ここへ戻つてくることがあるのだろうか。(片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』)

そこで、本論は、主体の特徴と過去における事象生起の有無という観点から「スルコトガアル」を考察し、「スルコトガアル」の意味のメカニズムを明らかにすることを目的とする。また、「スルコトガアル」の表す〈可能性〉は、いわゆる性質を表す潜在可能文のポテンシャルとどう違うかについても検討したい。

3. 「スルコトガアル」の意味について

3.1. 〈反復性〉を表す場合

まず、〈反復性〉を表す「スルコトガアル」の例文から考察する。

- (12) しきつめらしい顔で言った父親の言葉を私は今だに苦々しい思いで噛みしめることがある。(五木寛之『風に吹かれて』)
- (13) もっと驚いたことに、院長はものものしく耳鼻鏡を額につけ、患者の耳の穴を覗き込むことがある。耳のわるい患者ではない。頭のわるい患者の耳をだ。(北 杜夫『榆家の人はびと』)
- (14) 時々、夕ぐれの町を人力車の上に、体を斜めにした美しい姿勢で、女の人が乗って行くのを見ることがある。すると、信夫はその女の体温をじかに感じたように体が熱くなり、その夜一晩、女の幻影から逃れることができなかつた。(三浦綾子『塩狩峠』)
- (15) 太郎も、時々、自分が、重信とか、明久とか、義成とかいう重々しい名前だったらどんなにいいだろう、と考えることがある。(曾野綾子『太郎

- (16) 夕食の席で、それでも彼は世間一般の父親のように子供たちに問いかけることがある。「今日は学校で何を習った?」高校の受験間際の峻一は「ええ、まあ」と言い、藍子は活潑にませた口調で、周二はうつむいて不得要領に答える。(北 杜夫『楡家の人びと』)

(12) ~ (16) の主語「私」「院長」「信夫」「太郎」「彼」は個別の主体であり、述部の「噛み締める」「覗き込む」「見る」「考える」「問いかける」を時々生起させるという意味を表し、「スルコトガアル」は行為が繰り返し行われるという〈反復性〉を表す。また、次の(17)~(21)の「私」「影村」「彼」なども個別の主体であり、「スルコトガアル」は主体がときどき「黙り込む」「ニヤリとする」「気の毒に思う」「暗い顔になる」「失敗する」といった状態になる、または主体には動詞の表す事象が繰り返し生起するという〈反復性〉の意味を表す。

- (17) たとえば人と対談している最中に私は突然黙り込むことがある。そんな時、私は瞑想に訪問されたのである。(三木 清『人生論ノート』)
- (18) 時々、ふっと全く関連のない人の顔が頭に浮んで来て、思わずニヤリとすることがある。(五木寛之『風に吹かれて』)
- (19) 時々フォークの使い方で苦労している人を見かけて気の毒に思うことがある。(森 瑞子『ハンサム・ウーマンに乾杯』)
- (20) 影村は授業中に突然暗い顔になることがある。絶望の淵に立たされたような顔をして教壇に立ちすくんで、なにかに対して、はつきりと心の抵抗をこころみるような顔をする。(新田次郎『孤高

の 人』)

- (21) 彼は慎重な技巧家だが、それでもときには失敗することがある。(開高 健『パニック・裸の王様』)

では、一般的主体の場合は、「スルコトガアル」は〈反復性〉を表すことが可能なのであろうか。

- (22) ヒッチハイクは無銭旅行の常道だが、これも時にエライ目にあうことがあるらしい。(五木寛之『風に吹かれて』)
- (23) 幸福は人々の心を開くのに役立つが、不幸もまた、同じ役目をすることがあるものだ。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)
- (24) 人間というのは不思議な存在だ。思いがけないところから教えられることがある。(立原正秋『冬の旅』)
- (25) ずっと以前になくしたものが、ある朝ふと、もと置いた場所に見つかることがある。きれいな、昔あったままの姿で。なくしたときよりも、かえって新しく見えたりする。(片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (26) 擬態語は普通ひらがなですが、カタカナで書くこともあります。(『新文化日本語・中級 3』)

(22) から (26) の「ヒッチハイク」「人間」「不幸」「なくしたもの」「擬態語」は特定または個別のものではなく、一般的な出来事や主体である。(22) は、ヒッチハイクをしてエライ目にあったことを体験した人が背景にあり、その事象の生起が繰り返されていることを意味する。また、(23) は、特定の不幸を意味するのではなく、一般論として不幸も幸福と同じように、時々人々の心を開くのに役

に立っているのであり、「スルコトガアル」は〈反復性〉を表す。(24)

(25) (26) も同様に、人間には思いがけないところから教わることと、なくしたものがあとの場所に見つかること、カタカナで書くことが、過去において繰り返し生起したといった行為の反復を表わすのである。

このように、〈反復性〉を表す「スルコトガアル」は、主体が個別的なものもあれば、一般的な場合も見られるのである。また、事象が過去において繰り返し生起したことを意味するので、過去の経験または事例が背景に存在しているということが指摘できる。

3. 2. 〈可能性〉を表す場合

3. 2. 1. タイプ I – 〈属性的 possibility〉

では、〈可能性〉を表す「スルコトガアル」の例文を見てみよう。

(27) うちの犬は黒い服を着ている人を見ると、吠える
ことがある。

(28) 仙台は4月に入ってからも雪が降ることがある。

(29) この栄養ドリンクは夜飲むと眠れなくなること
ある。

(27) ~ (29) の「うちの犬」「仙台」「この栄養ドリンク」は限定された個別的主体であり、「スルコトガアル」は主体の〈属性的 possibility〉を表す。例えば、(27) の場合は、うちの犬は今まで黒い服を着ている人に何回も吠えたことがあるので、過去における繰り返し行われる行為の経験から、この特徴を帯びるようになるのである。また、(28) の場合は、「仙台」はかつて4月に雪が観察されていたことから、その記録を根拠に、4月にも雪が降る特徴を持つ町である、ということを意味する。このタイプの「スルコトガアル」は、いわゆる経験または事例による主体の特性を表わし〈属性的 possibility〉という意味になる。(29) の「この栄養ドリンク」についても同じよ

うに説明することができる。

一方、次の（30）～（34）の「(病気の) 経過」「仏壇」「この機種のカメラ」「豆柴犬」「最近の若者」は、特定の個別的対象について述べるわけではないので、かつて生起したという事象の主体を想定することができない。そのため、繰り返しの経験が考えられず、「スルコトガアル」は〈反復性〉ではなく、〈可能性〉を表すと考えられる。

- (30) 経過は徐々に進行性であるが、中途で急に進むこともある。また経過中に球麻痺の症状を発し、或いは横隔膜及び他の呼吸筋が侵されて呼吸不能となることがある……。(北 杜夫『楡家のひと』)
- (31) 仏壇に直接水をこぼすと、本体や塗装面などに変化を起こすことがあります。水をこぼした場合には、乾いた布などですばやく水をふき取ります。また花立の水を取り替える時に、底に水滴が残っていないか確認します。仏壇の膳引き・引き出し・経机に手を掛けて立ち上がると、仏壇や経机が壊れたり倒れることができます。長年ご使用になると、仏壇の扉の蝶番のネジがゆるんでくることがあります。ゆるんだまま使用すると、仏壇を傷つけることがありますので、しっかり締め直します。
(<http://www.butsudanya.co.jp/butsudanHandlingManual.html>)
- (32) (電気屋で) この機種のカメラは水に濡れると、壊れることがある。
- (33) 豆柴犬は餌を与えられすぎると、大きくなることがある。
- (34) 最近の若者は説教されるとすぐ泣くことがある。

(32) を例にとると、「この機種のカメラ」は、目の前のカメラではなく、同じ機種のものがかつて何回か水に濡れて壊れたことがある、またはそのカメラの素材や機能などの諸側面から、事象生起の可能性が十分想定できるという意味を表す。また、(33) の「豆柴犬」の場合も同様に、特定の豆柴犬がかつて餌を与えられすぎて大きくなつたことの叙述というより、過去にはそういう前例があったことから、豆柴犬は「餌を与えられすぎると大きくなる」特徴を持っている、という〈属性的 possibility〉を表す。このように、このタイプの「スルコトガアル」は、特定した主体の経験がなくとも、過去または背後に同類の物がその経験を持っている、または実験や理屈の上では事象の生起がありうる、といった根拠があれば、〈 possibility〉が予測され成立するのである。

以上のことから、このタイプの「スルコトガアル」は、事象生起の潜在可能性という〈属性的 possibility〉を表わし、主体には個別的なものも一般的なものも見られ、意味の背景にはそれぞれ過去の経験と事例が存在していると言える。

では、「スルコトガアル」の表す〈属性的 possibility〉は、潜在可能文の表す可能性とは同質のものなのであろうか。以下の例文を見れば明らかである。

(35) a 私はチーズケーキを作ることができる。

b??私はチーズケーキを作ることができるが、できない時もある。

(36) a 豆柴犬は餌を与えられすぎると、大きくなることがある。 (前掲 (33))

b 豆柴犬は餌を与えられすぎると、大きくなることがあるが、大きくならない時もある。

(35) のような潜在可能文の場合は、主体がチーズケーキを作れないといった状況が想定されていないのに対し、(36) のような「ス

ルコトガアル」は「豆柴犬」が大きくならない事象の生起が十分想定できるのである。よって、(36) b のように、「スルコトガアル」は「～ない時もある」という事象の生起をキャンセルする文との共起が可能となる。つまり、「スルコトガアル」が表す〈属性的 possibility〉は、一般に認識されている恒常的な性質から逸脱した、条件付きのポテンシャルであり、絶対的なものではない、ということになる。

3.2.2. タイプII – 〈事象生起の可能性〉

では、次の例文を見ていただきたい。

(37) 台湾人は日本人を見ると、声をかけることがある。

(37) の「スルコトガアル」は、親日派の台湾人は、日本人を見ると声をかけたりすることが今まで何度も起きた、といった〈反復性〉の意味を表す。しかし、例えば、目の前で日本人の観光団体を見かけてそわそわしている台湾人を見て、たぶんこれから声をかけるだろう、といった場合は、「スルコトガアル」は〈反復性〉ではなく、〈可能性〉という意味が読み取れるようになる。

(38) (目の前で台湾人と日本人の観光団体が一緒になりそうなところを見て)

台湾人は日本人を見ると、声をかけることがあるから、たぶんその人たちも声をかけに行くでしょう。

では、なぜ (37) と (38) の「スルコトガアル」にはこのような意味の違いが見られるのであろうか。(37) の「台湾人」はいわゆる総称であり、不特定な主体を指しているので、かつて台湾人が日本人を見かけて声をかけたくなったことが繰り返し生起したという過去の事例から〈反復性〉の意味を表すのである。それに対して、(38)

の「台湾人」の場合は、一見して（37）のそれと同じように抽象的な総称ではあるものの、これから生起する事象について述べるため、「台湾人」が「目の前の台湾人」に特定されることによって、主体が具体的になり、それにともなって事象のアクチュアル性も強まってくるのである。つまり、特定された主体にこれから事象が生起しそうなことを述べる際には叙述の焦点が未来に当てられ、〈事象生起の可能性〉の意味合いが強まってくる、ということになる。

- (39) Q：試験や面接が予告なしに行われることはある
ますか。

A：そういうケースはありませんので、ご安心
してご来場下さい。

（<http://www.gosetsu.com/2012/pages/faq>）

- (40) 【造影 CT 検査説明書】

当日は、再来受付機で受付後、予約時間の 10 分前までに放射線科窓口にお越し下さい。緊急検査や前処置等の都合で、検査開始が若干遅れることもありますので、ご了承下さい。

- (41) 【Yahoo!オークション 出品にあたっての注意】
ブランド品を加工して別な商品を作った場合や、商標が表示されている包装紙、リボンなどを加工する場合なども商標権に抵触することがありますので、ご注意ください。

（<http://special.auctions.yahoo.co.jp/html/rules/sell5.html>）

（39）は新卒のための就職・合同企業説明会に関する質問とその答えであるが、答えの「そういうケースはありません」からわかるように、過去の事例の有無が〈事象生起の可能性〉の根拠になっており、予告なしの試験または面接が繰り返し行われるという意味

ではなく、そういう〈事象生起の可能性〉があるかどうかという意味を表すのである。(40) (41) も同様に、「検査開始が若干遅れる」「商標権に抵触する」がかつて起こったことが背景にあり、過去の事例が存在しているからこそ、これから生起することも十分考えられるため、「スルコトガアル」はこれから検査を受ける人、またはオークションに出品する人に〈事象生起の可能性〉を表すのである。このように、〈スルコトガアル〉の前後の表現で事象がこれから生起するということがはっきりした場合は、主体が一般的に見えてもある程度特定され、叙述の焦点が未来に当てられるようになるので、〈事象生起の可能性〉という意味を表わすのである。

また、次の(42)と(43)の個別的主体の場合も同じように、(42)は彼がときどき怒り出すことを意味し、「スルコトガアル」は〈反復性〉を表わすのに対して、(43)の場合は、これから先に起こることを示唆する文脈を付け加えることによって、叙述の焦点が過去から未来へと移り、事象生起のアクチュアル性が強まって、「スルコトガアル」は過去の経験による〈事象生起の可能性〉を表すことになるのである。

(42) 彼は急に怒り出すことがある。 (前掲 (9))

(43) 彼は急に怒り出すことがあるので、気をつけて話
したほうがいい。 (前掲 (10))

このように、「スルコトガアル」は、事象の生起が未来へ繋がることによって、叙述の焦点が未来に当てられ、意味が〈反復性〉から〈事象生起の可能性〉へと移行していく、ということが指摘できる。

3.2.3. タイプIII－〈仮想の可能性〉

〈可能性〉を表す「スルコトガアル」には、次のようなタイプも

- (44) 父の死によって経済的に困窮することがあるとしても、驚きあわてないこと。(三浦綾子『塩狩峠』)
- (45) 今後縁談のあるたびに、少しは迷い、心を動かすことがあるとしても、結局は自分はふじ子を見捨てて、他の女と結婚することはできないのではないかと、信夫は思った。(三浦綾子『塩狩峠』)
- (46) もし、もう一度、関係を回復することがあるとしても、それはすべてを御破算にしてからのことである。(安部公房『砂の女』)
- (47) 「とってもいい人なのよ、パパだって、やがてアメリカへ行くことがあるでしょ、知ってる人がいれば心強いじゃないの、啓一にもね、是非、アメリカの大学へ入るようになっていってくれてるのよ」どこまでが打算なのか、三つの啓一がかりに大学へ入るとして、後十五年、それまで退職官吏の寿命がつづくものかと、茶化したかったが、京子の胸算用めかした台詞はあくまで夫妻むかえれば金もかかるうその弁解。(野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』)
- (48) いつか自分が勝つだろう、いつか再び起てないように、こいつを、こっぴどくやっつけて仕舞うことがあるだろう。(井上 靖『あすなろ物語』)

(44)～(48)の「自分」「パパ」などは、いずれも個別的主体ではあるが、「スルコトガアル」が表すのは〈可能性〉であり、〈反復性〉ではない。例えば、(44)は「経済的に困窮する」ことが起きるかどうかはっきりしないが、もしそういうことがあったら驚き慌てないことが大事だ、という意味を表すので、「スルコトガアル」は事象生起の〈可能性〉を仮定する意味になる。(45)の場合も同様に、

今後縁談の際に何が起きるか誰にもわからないが、もし「心を動かす」ようなことが起きたとしても、自分はふじ子を見捨ててほかの人と結婚することは無理だらうと想定し、その可能性を意味する。

(46) ~ (48) についても同じようなことが言える。このように、個別的主体の場合は、「スルコトガアル」は〈反復性〉のみならず、〈仮想の可能性〉を表す場合もある、ということが指摘できる。そして、このタイプの「スルコトガアル」は、事象がかつて生起したといった〈可能性〉の意味を支える過去の経験・事例が存在しないので、「ーとしても」「でしょ」などのような事象生起の不確かさを表す形式と一緒に使われる傾向があると言える。次の(49)のように、過去の経験・事例が存在しない〈仮想の可能性〉を表す「スルコトガアル」が断定の形では不適格になることがその裏づけとなる。

- (49) a *うちのパソコンは今まで一度もフリーズしたことはないが、これからフリーズすることがある。
b うちのパソコンは今まで一度もフリーズしたことないが、これからフリーズすることがあるかもしだれない。

では、一般的の主体の場合は、「スルコトガアル」は〈仮想の可能性〉を表わせるのであろうか。

- (50) a *人間は近い将来誰でも宇宙旅行をすることがある。
b ??人間は近い将来誰でも宇宙旅行をすることがあるだろう。
(51) a *台湾の学生は20年後入学試験を受けずに大学に入ることがある。
b ??台湾の学生は20年後入学試験を受けずに大学に入ることがあるかもしだれない。

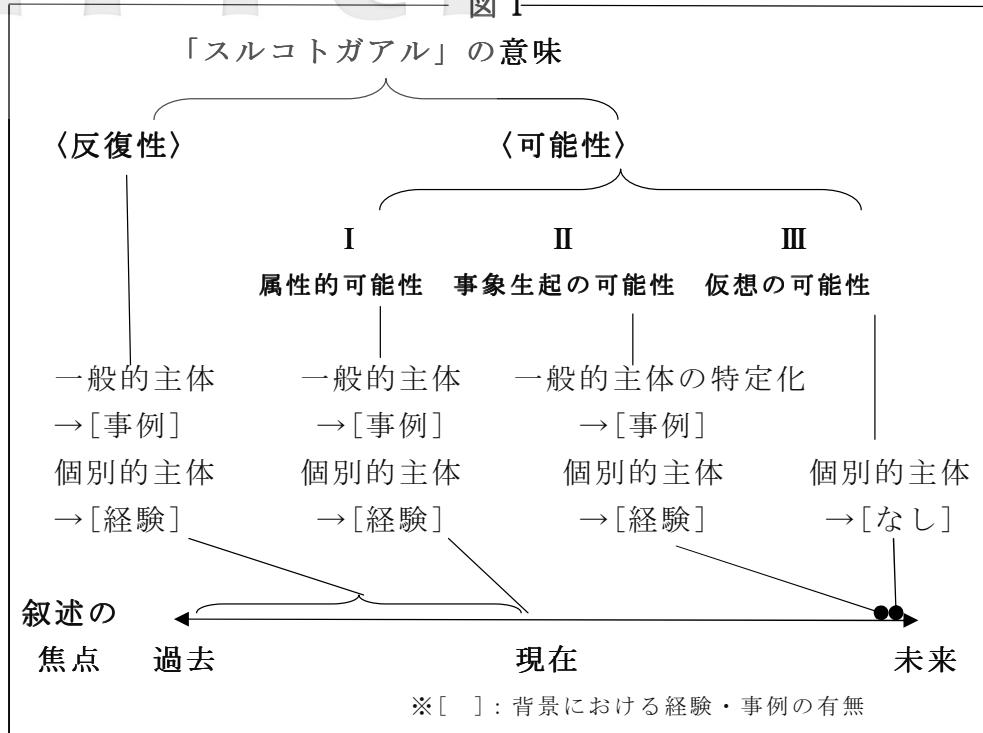
(50) (51) のように、たとえ文末に推量を表わす「だろう」

「かもしれない」を付け加えても、未来の事象生起の可能性を表わすことが難しい。その理由は、一般的主体の事象生起は多数の主体にその事象が生起することを意味し、事象を実現させる確率が高くなければならないからである。例えば、(51) の a と b はいずれも不自然な文であるが、もし、台湾の大学は少子化対策として、今後学生を集めるために、入学試験の代わりにほかの方法を取り入れたほうが有効だ、などの話題のトーク番組での発話、といった状況設定だったら、文の許容度があがると考えられる。したがって、一般的主体の場合は、こういった特別な状況でなければ、「スルコトガアル」は叙述の焦点が未来に当てられる〈仮想の可能性〉を表わせないのである。

4. おわりに

以上、本論では主体の特徴と過去における事象生起の有無という観点から「スルコトガアル」の意味を検討した。その結果、「スルコトガアル」は基本的には主体が個別的にも一般的にも〈反復性〉、〈可能性〉を表すことが可能である、ということを明らかにした。また、「スルコトガアル」の表す〈可能性〉は、事象がかつて生起したかどうかといった経験・事例との関わりと叙述の焦点の当て方によって、大きく三つのタイプに分けることができた。したがって、過去の経験及び事例の有無と、叙述の焦点が時間軸においてどのように当てられるのかということは、「スルコトガアル」の意味を決める重要なファクターである。さらに、「スルコトガアル」の表す〈属性的 possibility〉は、一般に認識されている性質から逸脱した、条件付きのポテンシャルであり、潜在可能文の表すような絶対的なものではない、ということを明らかにした。本論の考察結果をまとめると、次の図 1 のようになる。

図 1



さて、本論は、主体の特徴と過去における事象生起の有無から「スルコトガアル」の意味について考察したが、〈経験〉を表わす「シタコトガアル」、過去形の「スルコトガアッタ」との関わりについて検討しなければならない。また、次の例文の示すように、述部の動詞によって「スルコトガアル」の適格性が変わってくるため、動詞の語彙的意味との関わりといった観点からの分析も必要であると考えている。

- (52) a (店頭で) このパソコンはフリーズすることがある。
 b うちのパソコンはフリーズすることがある。
- (53) a (店頭で) このコップは急に熱いお湯を入れると、割れることがある。

b * (自分のコップを友達に見せながら) このコップは急に熱いお湯を入れると、割れことがある。

すべて今後の課題である。

〈用例出典〉

『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』(新潮社、1995 年)
(実例の場合は、例文の後ろに出典を記した。出典名の無いものは作例である。)

〈参考文献〉

- 金水 敏 (2000) 「時間の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店
工藤真由美 (2002) 「現象と本質－方言の文法と標準語の文法－」『日本語文法』2 卷 2 号、くろしお出版
渋谷勝己 (1993) 「日本語の可能表現の諸相と発展」『大阪大學文学部紀要』第 33 冊第 1 分冊
——— (2005) 「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』第 1 卷 3 号、日本語学会
高橋太郎 (1994) 「ダブルテンスの観点からみた〈スルコトガアル〉の種々相」『立正大学文学部論叢』100
仁田義雄 (1981) 「可能性・蓋然性を表わす擬似ムード」『國語と國文學』687、東京大学国語国文学会
日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版
宮崎和人 (2004) 「反復性と可能性－現代日本語のスルコトガアルー」『Kansai Linguistic Society: Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society: KLS』12、関西言語学会

森山卓郎（2002）「可能性とその周辺－『かねない』『あり得る』『可能性がある』等の迂言的表現と『かもしれない』－」『日本語学』21－2、明治書院

吉川武時編（2003）『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房

付記：本論は、「現代日本語における可能表現と可能性表現をめぐって」（台湾行政院国家科学委員会若手研究、計画番号 NSC 100-2410-H-032-071-）の研究成果の一部である。また、本論は、日本比較文化学会第34回大会（2012.6.9）において口頭発表した内容を加筆、訂正したものである。査読の審査委員諸先生方からは的確なアドバイス、ご批判をいただき、御礼申し上げる。

airiti References

- Kinsui, S.(2000)Jikan no Hyogen. *Nihonganobunpo, No.2 Toki, Hitei to Toritate*. Iwanami Shoten, Japan.
- Kudo, M.(2002)Gensyo to Honshitsu:Hogen to Bunpo to Hyojungo no Bunpo. *Ninhongobunpo, No.2-2*. Kuroshio Shuppan, Japan.
- Miyazawa, K.(2004)Hanpukusei to Kanousei: Gendainihongo no “surukoto ga aru”. *Kansai Linguistic Society: Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society: KLS, No.12*. Kansai Gengogakkai, Japan.
- Moriyama, T.(2002)Kanousei to Sonosyuhen: “kanenai” “arienai” “kanousei ga aru” nadono Ugentekihyougen to
- Nitta, Y.(1981)Kanousei, Gaizensei wo Arawasu Gijimudo. *Kokugo to Kokubungaku, No.687*. Tokyodaigaku Kokugokokubun Gakkai. Japan.
- Nihonkijutsubunpokenkyukai. (2003) *Gendainihongobunpo, No.4 Part.8: Modality*. Kuroshio Shuppan, Japan.
- “kamoshirenai” . *Nihongogaku, No.21-2*. Meiji Shoin. Japan.
- Shibuya, K.(1993)Nihongo no Kanouhyougen no Hatten. *Osakadaigaku bungakubukiyo, No.33-1*.
- Shibuya, K.(2005)Nihongokanoukeishiki ni miru Bumpoka no Shosou. *Nihongo no Kenkyu, No.1-3*.The Society for Japanese Linguistics, Japan.
- Takahashi, T.(1994)A Study of “surukoto ga aru” from the viewpoint of Double Tense. *Risseidaigaku Bungakubu-ronsou, No.100*.
- Yoshikawa, T.(2003)*Keishikimeishi ga korede wakaru*. Hitsuji Shobou. Japan.

※2012年8月31日受理 2012年11月10日審査通過